

エチオピア、 アムハラ人の本音と建前

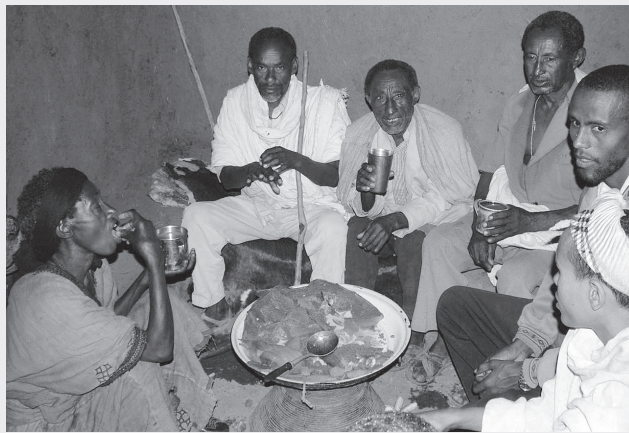
かわせ いっし
川瀬 慈

民博 文化資源研究センター

さあ、いっしよに食べよう

多民族国家のエチオピアにおいて、アムハラ人は国家の歴史上もつと長い期間、支配的な立場の民族として君臨してきた。日本から遠く離れた地で話されるアムハラ語だが、それを話すとき、歯がゆさと同時にわたしは不思議な懐かしさをおぼえることがある。

たとえば、日本特有の文化とみなされている本音と建前の論理である。これがアムハラ人のコミュニケーションにおいても重要なのだ。たとえば食をめぐるコミュニケーション。わたしが一〇年以上調査をおこなってきた北部の古都ゴンダールにおいて、人が食事をする場にくわすと「インネブラ！（アムハラ語で「さあ、いっしよに食べよう」の意）」と声をかけられる。声をかけられた側はしかし、どれだけ腹がすいていたとしても、うかつのつてはならない。なんらかの建前を述べて、誘いを断ることが美德とされる。そのことを文字通り受け取り、誘われるままに食事に手をつけたらどうなるか？ その人物は、非常識な人として非難されるのである。知る人ぞ知る、京都の「ぶぶ漬け」の話をおもいだしてしまう。



エチオピアの主食、インジェラを食べる人びと

アムハラ人の「奥ゆかしさ」

また、「本音」は独自の言いまわしによって隠されることもある。人びとの生活になじみが深い祝祭儀礼の音楽を担う吟遊詩人の唄のなかには「サムナワルク（「蟬と金の意）」とよばれる暗喩的表現による言

いまわしが各所にみられる。聴き手は、語の配置や発音を変化させて、頭のかであらたな語をつくりだし、蟬を溶かすがごとく、金、すなわち詩のなかにかくされたメッセージを導き出す必要がある。表面上は、聴き手の容姿を褒める内容であったり、地名を紹介するようには聞こえる唄のなかに、盛者必衰のほかなさを説き、驕り高ぶるものを強く戒める警句が隠されていたりする。吟遊詩人は唄のなかで、時の権力者を褒め称えるのみならず、この蟬と金によって婉曲的に揶揄したともいわれる。

以上のようなアムハラ人のコミュニケーションの「奥ゆかしさ」はどこからきたのだろう。それが、一七世紀から一八世紀にかけて栄華を極めたゴンダール王朝の封建社会の産物なのか、アフリカにはめざらしい文字文化の発展とかわるのか定かではない。わたしは、アムハラ流の本音と建前に翻弄され、その理解に苦労すると同時に、その内奥に潜む歴史文化に好奇心を刺激されて止まないのである。